

機関番号：37104

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21830080

研究課題名（和文）青年期の解離アセスメントの精緻化と心理療法への利用可能性の検討

研究課題名（英文）Assessment and Psychotherapy for dissociation in adolescence

研究代表者

舩田 亮太 (MASUDA RYOTA)

久留米大学医学部・助教

研究者番号：30547055

研究成果の概要（和文）：

本研究では、青年期を対象に解離アセスメントを精緻化させることとそれに伴う心理療法への利用可能性を探ることを目的とした。研究1では、精神科患者31名（男性11名、女性20名、平均31.45歳）を対象に日常的解離尺度、解離性体験尺度からなる質問紙を実施した。結果、精神病群（N=3）は解離得点全般が高い、気分障害群（N=3）は感情切替傾向が低く、没頭傾向が高い、不安障害群（N=7）は、健忘、没頭傾向が共に高いことが示唆された。研究2では、成人2事例に対し、上記質問紙とバウムテスト、ロールシャッハ・テストを実施した。結果、日常的解離尺度とバウムテスト、ロールシャッハ・テスト結果と一致しているものの、病的解離と質問紙法の一致については更なる検討を要した。研究3では、ある青年の心理面接事例を抽出し、日常的解離の視点に基づいた事例理解の重要性を検討した。事例分析の結果、引きこもりがちな青年の日常的解離体験をセラピストが正確にアセスメントし、共有することで自己世界から現実世界への橋渡しが促進される、という仮説が生成された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to develop the assessment of dissociation in adolescence and apply it to psychotherapy. In study1, thirty one patients (31) with mental disorder with mean age 31.45 years completed the questionnaire of Normal Dissociation Scale which was constructed four factors, temporary amnesia and imaginative involvements, fantasy, feeling of control, absorption, and Dissociative Experiences Scale (DES). As a result of analyses, the group of Schizophrenia(N=3) indicated High score on both normal dissociation scale and DES, the group of mood disorder(N=3) indicated low score on feeling of control, high score on fantasy, the group of anxiety Disorder(N=7) indicated high score on temporary amnesia and fantasy. In this study2, two male's patient were completed the questionnaire and practiced Baum and Rorschach test. As a result, Normal Dissociation Scale was correlated positively with Baum test and Rorschach test. On the other hand, DES wasn't correlated clearly Rorschach test. In this study 3, it was investigated importance of understanding young adults from the view point of Normal Dissociation. The results of case study of a young adult who was in social withdrawal, it was hypothesized building a bridge between social withdrawal client's self and real world were accelerated by therapist's assessment and sharing for client's normal dissociation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	860,000	258,000	1,118,000
2010年度	770,000	231,000	1,001,000
総計	1,630,000	489,000	2,119,000

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：日常的解離、病的解離、日常的解離尺度、解離性体験尺度、解離性障害

### 1. 研究開始当初の背景

解離とは「意識・記憶・同一性・知覚・感情などの通常は統合されている心的機能の統合性の喪失」を意味する(田辺,2002)。現在、解離は米国の精神医学診断マニュアルである DSM-IV-TR (APA,2000) で解離性障害とまとめられている。そして、その主な病因は、虐待、犯罪被害等の心的外傷(trauma)体験とされている。

一方で、解離は無意識的な防衛機能として、肯定的に捉える視点も存在する(Ludwig,A.M.,1983)。筆者は、健常者に比較的高頻度に生じる、非病理的から軽度の解離を「**日常的解離**」(以下統一)と呼び、「意識・記憶・同一性等の遮断・喪失が一時的・限定的で、本人にその自覚があり、それら体験から自分の意志である程度戻ることができる統制性のある解離機制/体験」と操作的に定義した。特に、青年期は、他年代層よりも多く解離が出現するという報告(足立ら,2005)もある。中学・高校、児相、学生相談等の非医療機関では、いじめ、虐待等があることが多く、青年の解離が病的/日常的かを判断し、病理水準に応じた心理援助を行う必要がある(舛田・中村,2004)

### 2. 研究の目的

2年間の研究目標は、①統制群、臨床群との比較による日常的解離尺度の基準関連妥当性の検討(研究1)、②ロールシャッハ・テストの併用による日常的解離尺度の収束的妥当性の検討(研究2)、③日常的解離尺度、解離性体験尺度を併用した青年期臨床事例への心理療法の利用可能性の検討(研究3)であった。

### 3. 研究の方法

研究1：統制群に関しては、既に舛田(2009)でA県内の大学生、大学院生、高専生総計614名(男性198名、女性405名、性別不明11名、平均年齢20.12歳、SD1.92)をデータ収集・分析報告しているため、本研究では臨床群のデータ収集を主眼とする。B病院精神科外来受診及び病棟入院患者を対象とする。なおA病院内での診療時間の中で、担当精神科医、患者の書面同意に基づいた上で、下記質問紙を個別面接室内で実施する。

研究2：研究1で、解離性障害疑いの患者に対して、日常的解離尺度、解離性体験尺度、バウムテスト・ロールシャッハ・テストを実施する。

研究3：各機関において筆者が心理療法を担当した事例から、日常的解離の視点が有用と思われた事例を抽出する。

### 4. 研究の結果

#### 研究1

本研究では、臨床群における日常的解離、病的解離の比較を目的とし、A病院患者31名(男性11名、女性20名、平均31.45歳)をDSM-IV-TRを用いて診断分類を行った。そのうち、知的障害、器質性精神病(薬物依存含む)、てんかんを除き、かつ解離性体験尺度(DES)を20点以上示したものを病的解離あり群として抽出した。結果13人

(男性2、女性11、平均27.15歳、SD10.26)が分析対象となった。抽出された病的解離あり群を診断分類で分けたところ、①精神病群(N=3)、②気分障害群(N=3)、③不安障害群(N=7)とグループ化された。日常的解離尺度因子(一過性健忘、空想、感情切り替え、没頭・熱狂)と解離性体験尺度は、精神病群(3.9, 3.2, 2.0, 2.6, 67.5)、気分障害群(2.9, 2.5, 1.5, 3.2, 20.7)、不安障害群(3.5, 2.2, 2.1, 3.0, 30)という結果となった。これらから、①精神病群は健忘傾向が高く、没頭傾向が低く、解離得点全般が高い、②気分障害群は感情切替傾向が低く、没頭傾向が高い、③不安障害群は、健忘傾向、没頭傾向が共に高いことが示唆された。今後の課題としては臨床群を増加して、更に解離の特徴を詳しく検討する必要がある。

#### 研究2

解離性障害が疑われた成人男性2事例に対し、質問紙では日常的解離尺度、解離性体験尺度(田辺,1994)、投影法としてバウムテスト、ロールシャッハ・テストを実施した。

事例1の質問紙結果は日常的解離尺度各因子(5点)において一過性健忘:2.67、空想:2.33、感情切り替え:2.75、没頭・熱狂2.67、解離性体験尺度14点となり、病的解離は顕著でないが、元来の空想的傾向はやや高いようであった。バウムテスト、ロールシャッハテストでは神経症水準の特徴がみられた。元来細やかさ・繊細さを有し、素朴で幼い世界を好む傾向。外界からの刺激による内的動揺が顕著となり、生活史健忘という対処スタイルを無意識的に用いている可能性が示唆された。これは日常的解離尺度の「空想性」高さとも一致するものである。しかし、「解離」の存在は、ある程度の形態水準の良好さは、

「形態規定性の極端に低い全体反応(青木, 2001)」という生活史健忘のロ・テスト特徴と一致せず、解離性体験尺度の低得点傾向からも、「解離」の存在は決定的でなかった。

事例 2 の質問紙結果は日常的解離尺度各因子において、一過性健忘・没入 3.33、空想 1.33、感情切替 2.0、没頭・熱狂 2.67、解離性体験尺度 22.5 点となり、病的解離は顕著でないが、没入傾向はやや高いようであった。バウムテスト、ロールシャッハ・テストでは、神経症水準の特徴がみられたが、潜在的に精神病水準の不安要素を有し、病態水準は外界からの情緒刺激の量、強さによって大きく変動するようであった。描写 or 認知・説明の) 明細度の変化のように、本事例については、自己内で考えや気持ちが処理できず、そこにこそ“淡々とした穏やかな内界に戻す”解離が作用したとも考えられた。

以上から研究 2 では日常的解離尺度と投影法結果は一致しているものの、病的解離と質問紙法の一致については検討を要する。今後、研究 1 で臨床群を増加するに従い、解離性障害の下位分類に応じた質問紙法結果と投影法の特徴を精査していくことが重要である。

### 研究 3

本研究では、日常的解離の「一過性健忘」「空想」「感情切り替え」「没頭・熱狂」、病的解離に着目することが有効と思われる心理面接を抽出し、事例研究を行った。

筆者が 1 年間の関わりを持った青年期中期の事例を提示した。心理士がクライアントの日常的解離体験をアセスメントし、その体験を共有すること、現実調整担当者がクライアントに社会的、教育的刺激を与え続けていくことの重要性を考察した。第 1 期は、クライアントの遊具の持ち込みにより、来談意欲の向上だけでなく、非言語的交流と言語的交流の橋渡しが行われた。第 2 期は、理想化したセラピストから友情関係を提供されないことで面接への抵抗が生じ、橋渡し機能の逆説性が見出された。第 3 期はセラピストが架空世界への没頭を共有することで、クライアントのセラピストに対する脱錯覚が促進され、自己世界と現実世界の橋渡しが行われた。青年の日常的解離体験をセラピストが正確にアセスメントし、共有することで自己世界から現実世界への橋渡しが促進される、という仮説が生成された。

ただし本事例で仮説生成された、日常的解離と橋渡し機能による心理療法過程は、現実調整担当者と心理士が共に存在する援助構造を議論の前提としている。心理士のみが勤務する場合などの他の臨床場面における日常的解離のアセスメントや心理療法過程についても検討する必要がある。今後

複数の事例を累積し、日常的解離、病的解離とその下位分類を統制して、再検討することが重要であろう。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

1. 舛田亮太(編著) 2011 心理臨床の広場  
心理臨床の職場いろいろ vol6.医療編 1 久留米大学精神神経科付属カウンセリングセンター p50. 創元社
2. 舛田亮太 (編著) 2009 心理臨床の広場 vol3 : 特集「被害者支援の心理臨床」  
総論担当「さまざまな領域での被害者支援」.p14-15. 創元社
3. 舛田亮太 2009 ひきこもりがちな高機能広汎性発達障害青年との心理療法過程—日常的解離と橋渡し機能の視点から—  
心理臨床学研究,27(4),pp468-479.

[学会発表] (計 5 件)

・口頭発表 3 件

4. 舛田亮太・前田正治 2010 意識消失が認められた成人男性のロールシャッハ・テスト 日本ロールシャッハ学会第 14 回大会発表論文集, p40. 帝塚山学院大学 10.29-31.
5. 舛田亮太・前田正治 2009 生活史健忘をくり返す成人男性のロールシャッハ・テスト 日本ロールシャッハ学会大13回大会 発表論文集, pp39. 大妻女子大学 10. 31
6. 舛田亮太 2009 ナイフを携帯する青年との関わり—解離の見立てと橋渡し—  
日本精神分析学会第 55 回大会発表論文集, pp102-104. 大阪国際会議場 11. 7

・ポスター発表 2件

7. 舛田亮太・前田正治・内村直尚 2010 病的解離に対する自己への意味づけと治療の動機づけ 日本精神科診断学会第30回大会発表論文集, p73. 九州大学医学部 11.11-12.

8. 舛田亮太・前田正治 2010 健常群における解離と患者群の解離の比較 - 予備研究 - 日本トラウマティック・ストレス学会発表論文集, p105 神戸国際会議場 3.6

〔図書〕 (計1件)

9.心理測定尺度集IV 堀洋道(監修)松井豊・宮本聡介(編) 「日常的離人尺度(舛田,2006)」 279-282 サイエンス社 2011.3月

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

舛田 亮太 (MASUDA RYOTA)

久留米大学医学部・助教

研究者番号：30547055

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし